

昔話なんかじゃない、戦争の話。

戦場での九死に一生から得た人生の教訓

瀧本邦慶さん(93)は17才で海軍に志願し、佐世保海兵団へ入団。「兵隊へ行く時の気持ち？ そりゃ小学校から軍国教育を受けて完全に洗脳されたから。嫌とはいえませんが」と語る瀧本さん。母が言ってくれた言葉「気いつけて行っておいでや」は当時の精一杯の親心。今も忘れられないという。「僕自身も心の底では本当は行きたくないですわな。行ったら死ぬことが分かっているんやから」と当時の親子の複雑な心境を語ってくれた。

入隊後、瀧本さんを待っていたのは海軍での命の危機を感じるほどの暴力。そこから逃れるために、必死で勉強して「整備兵」への転属試験を受け、海軍航空隊の整備兵として空母「飛龍」へと乗り込み、昭和16(1941)年11月、米軍と開戦するきっかけとなる真珠湾攻撃に向かうことに。「隠密行動だったために、我々もその世紀の作戦を知らされたのは出航後のことでした。乗組員はみな淡々としていました。命がけの訓練を重ねていましたしね」。同年12月8日真珠湾攻撃

瀧本邦慶さん

海軍整備兵として戦地に赴き、九死に一生を得る経験を経て帰還。現在は若者に戦争を語り継ぐため、小中学校などで講演する。

の後、東南アジアの産油地域を制圧するいわゆる南方作戦にも参加した瀧本さん。連勝続きで「向かうところ敵なし。鼻歌まじりでミッドウェー海戦に向かいました」しかしこれが太平洋戦争のターニングポイントとなる。昭和17(1942)年5月、赤城・加賀・蒼龍・飛龍、海軍の虎の子4隻の空母を配備したが、「たった一日で4空母や航空機300機を含む大艦隊が壊滅したんです」。1,500人が乗っていた飛龍では約1,000人が亡くなったが、何とか生き延びた瀧本さん。海軍の力を削がれた日本は戦争の主導権を失った。

内地へ帰り聞いた大本営発表は「1隻撃沈1隻大破」というもの。敗戦を国民には伝えなかった。「それが戦争の実情です。政府や国が何を言っても、だまされたらあかん。鵜呑みにすることなく自分の頭で考えないといけない。私が若者に伝えたいのはそういうことです」。



真珠湾攻撃、ミッドウェー海戦…歴史の教科書に登場する昔話と思っていたら、それは間違い。実際に戦場をその目で見て来た人たちの話を聞かせていただいた。

両手と両目を失って得たもの

藤野高明さん(76)の戦争の記憶は、実家の福岡で見た真っ赤にただれるように焼けた北の空だという。昭和20(1945)年6月19日の福岡大空襲であつた。「向こうから大勢の人が必死で逃げてきた様子が今も目に焼き付いています」。彼の人生を変えたのは、終戦翌年の夏の日。昭和21(1946)年7月18日、通っていた小学校近くの川で5才の弟と一緒に、銀色の金属部品を拾い集めていたという。「これが不発弾だったのです。釘で中のものをかきだそうとしたところ突然爆発しました。弟は即死、私は命こそはとりとめましたが両手と両目の視力を失いました」。当時7才の少年をおそった現実はありませんにも厳しすぎた。

戦後の混乱期、何の補償もない。指がないと点字が読めないと言学校への入学を断られ、行き場のない気持ちになり、自殺を考えたこともあったという。そんな

時に、北条民雄の『いのちの初夜』という一冊と出会い、舌や唇を使って点字を読むようになった。「点字が私の光になったのです」と藤野さんは19才の頃の衝撃を振り返る。入学を受け入れてくれた大阪市立盲学校で猛勉強の末、通信教育の大学へ進み、昭和48(1973)年盲学校の社会科教諭になる。「弟の分まで生きて」と言った母の言葉を胸に、失明し絶望する若者たちに生きることの尊さを伝え続けてきた。30年間の教師生活で関わった生徒は1,000人を数える。



藤野高明さん

自身の体験を『あの夏の朝から』『楽しく生きる』などの著書にまとめ、人間の持つ可能性と命の尊さ、生きる喜びを伝える活動をしている。